

はじめに

國學院大學學術フロンティア事業実行委員会

委員長 小川 直之（日本文化研究所教授）

平成11年度に文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業として指定を受けた学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」は、平成15年度に最終年度を迎え、ここに5年間の総括報告書を刊行する。

人類が、文字に加えて表現手段としての映像を手に入れたのは、1839年にフランス人のマンデ・ダゲールによってダゲレオタイプの写真法が発明されてからであった。現在の写真技術につながるこの発明は、ものやことを二次元世界に表現するばかりでなく、撮されたものやことを後世に伝える手段ともなり、精神世界にも大きな変化をもたらしたといえる。

日本に写真技術が伝えられたのは幕末のことであったが、その当初から肖像写真は主要な撮影主題であった。肖像写真は、単に人物の画像としてではなく、その肖像が社会化されることによって特異な政治性や精神性が付与されていったのである。写真技術の普及は、位牌に加えて肖像を祭祀の対象ともし、誕生からの家族写真アルバムは家族の歴史を表象するものになっている。写真技術の歴史は、その成立からまだ170年足らずであるが、精神世界においても大きな位置を占めるようになっている。

学術世界においても、人類の文化や歴史の研究は長い間、文字記録と造形物が対象とされてきたが、写真技術の普及によって文字記録や造形物では資料化が困難なものやことが資料化できるようになった。しかもこの画像は、ものやことを視覚化するだけではなく、ものやことが置かれている情景をもあらわすことで、文字記録や造形物とその背景とをつなぐ資料ともなる。ある場面を写し取った写真は、撮影者の意図を超えた情報が盛り込まれてもおり、学術資料としての有用性は極めて高いのである。こうした価値をもちながらも、写真の資料的位置づけについては十分な議論がなされてこなかったし、文字記録や造形物に対する二次資料という認識に留まっていた。

國學院大學には、大場磐雄博士撮影の諸写真、折口信夫博士にかかる写真や画像資料、柴田常恵による諸写真をはじめとして、多くの画像資料が所蔵されている。これらは明治時代以降の、日本の文化や歴史に関する画像資料であり、本事業では、こうした劣化画像を最新のデジタル技術によって再生させ、学術的な再評価を行うことで資料化をはかるものであった。画像資料の調査研究は、春日大社資料、武田塾資料、宮地直一博士資料など、学外資料にも及んでおり、研究成果は『柴田常恵資料目録』、『大場磐雄博士資料目録』、『國學院大學学術フロンティア事業研究報告 人文科学と画像資料研究』第1集、さらに Web 上でも公開している諸論文に結実している。

平成16年度からは、さらに本事業の2ヶ年の継続が決定されており、さらなる研究の進展と幅広い活用に向けての資料公開が進められることになる。こうした活動を通じて、画像資料の一次資料としての認識を深めることが急務である。